校難に明け国難に暮れた十余年

学園主義をとなえ、きわめてユニークな施策をとった鈴木卓苗初代校長は、昭和七年四月に本校を辞任した。開校以来在任六年間を通じて率先垂範して校風づくりにつとめてきた同校長は、職員からも生徒からも全幅の敬愛を集めていただけに、その辞任がもたらした動揺は大きかった。

昭和七年といえば、三月に満州国の建国宣言がなされた年である。さらに五月には五・一五事件が起こって、犬養首相が暗殺されている。ここに原敬内閣以来の政党内閣時代は終わりを告げ、いわゆる大正デモクラシーの命脈が尽きた。かわって台頭するのが、軍の独裁体制である。

鈴木校長を、本校における大正デモクラシーの旗手とみなすことには異論もあろうが、生徒の個性を尊重し、すなおに伸ばしてやりたいとする鈴木校長の教育理念には、当時としてはめずらしい自由主義的・個人主義的な気風が感じられる。しかし世の中は、すでにそういった気風を許さない方向に、音をたてて急転回しつつあった。

時代の趨勢と学園内の動きとは、決して無縁ではない。それどころか、新しい知識をつぎの世代に伝達し、明日を背負う人材を育成するのが学園の使命である以上、むしろ時代を一歩先取りした動きのあらわれる方が、より本来の姿に近いであろう。本県私立中学の雄として草創期を送り、さらに発展期に入ろうとする岩手中学校の前途は、その意味で、当然世界史の流れや日本の国情と、深いかかわりを持たざるを得なかったのである。

十九世紀を代表する国がイギリスだったとすれば、二十世紀を代表する国はアメリカである。第一次大戦で漁夫の利を得、もっとも豊かな資本主義国となったアメリカは、慢性不況に悩む諸国をしり目に、一九二〇年代を通じてひとり「永遠の繁栄」を誇っていた。

しかしそのアメリカにも、昭和四年（一九二九年）秋、ウォール街の株式暴落をきっかけにして恐慌が起こり、以後しばらく経済崩壊が続いて、全世界を不況の谷間に沈めた。すなわち世界恐慌である。

この世界恐慌が契機となって、歴史の歯車が大きく動いて行く。金流出に悩むイギリスの不況対策は、スターリング・ブロックの結成であった。これで深刻な打撃を受けたドイツは、ナチスの独裁体制のもとにマルク・ブロックを樹立した。英・独両国のブロック経済形成によって世界市場からしめ出されたアメリカは、国内でニュー・ディール政策をとるとともに、ドル・ブロックの形成に走った。こうして世界は、たがいに対立関係にあるいくつかのブロック経済圏に分割されてしまった。

第一次大戦後、わが国も、世界恐慌の荒波をまともにかぶった。為替相場の安定と輸出競争力の強化をねらいとして断行した金輸出解禁の措置は、タイミングが悪く、不況をいっそう深刻なものにした。日本経済は未曽有の危機に直面したが、ブロック化の進んだ国際環境のもとにあっては、みずからもまた独自のブロック経済圏を形成する以外、不況脱出の道はなかった。こういった事情のもとに、満州への進出が強化されたのである。

けれども、列強の反対を押し切って、日満ブロックないしは円ブロックを形成し、それを維持するのは、決して容易ではなかった。中国大陸への進出が、たとえ当時としてはやむをえない面があったにしても、強引な武力進出である事実は否定できず、昭和六年の満州事変勃発から、戦乱はしだいに拡大の一途をたどることになる。

このような国家の非常事態に直面して、本校創立者の三田義正理事長は時代の要請に即応すべく、校風の一大改革の必要を痛感したもののようである。その具体的なあらわれが、当初から岩手奨学会

理事として名をつらねていた著名な軍人、栃内曽次郎海軍大将を、第二代校長として迎えることであった。すでに貴族院議員に任じられ、多忙な日々を送っていた栃内大将であったが、旧知の三田理事長の懇望を入れ、校長就任を承諾した。この人事は、その時代として当を得たものであり、本校関係者は大きな期待を抱いたのであったが、その就任式（昭和七年七月八日）の席上、演説中に倒れ、四日後に急逝するという何人も予測するはずもない非運に見舞われた。

鈴木校長の辞任、栃内校長の急逝と、短かい間に二度も学校の中心を失なった昭和七年は、まことに「校難」の年であった。さらに折からの深刻な不況で、県内の銀行にも倒産や整理の混乱が生じ、生徒が入学以来積立てていた報恩旅行（修学旅行）のための貯金までふいになった。また試験における不正行為、それに対する自治会としての制裁、自治会役員の処分、五年生の同盟休校、学校側の処分撤回といった一連の事件が発生し、学園は騒然とした空気に包まれた。

そして翌昭和八年四月、第三代の佐々木哲郎校長が着任した。学校経営に豊富な経験を持つ佐々木校長は、三田理事長の意を体して、さっそく校風の一大改革に着手した。最初の職員会議でえんえんと所信を表明したあと、いま述べたことに反対の方はすぐ退職願を書いていただきたいとつけ加え、職員のどぎもを抜いた。

佐々木校長のねらいは、規律ある学園づくりを推進する点にあった。諸規定を厳守させたため、落第者が急増した。ほどなく岩手中学校は、一糸乱れぬ団体行動のみごとさで、名を知られるようになった。もっともいい例が軍事教練で、その成績は県下一だったといわれる。ついにはこれが認められて、昭和十年十一月、秩父宮殿下来臨の栄に輝くことになるのである。

天皇は神聖にして侵すべからずとうたった大日本帝国憲法のもとで、皇室の神格化が進められていたときに、天皇の弟君である宮様が学校にお見えになるというのは、それこそたいへんなできごとであった。理事長・校長はいうに及ばず、職員・生徒全員がひとしく名誉に胸をおどらせ、準備万端を整えて、十一月七日の台臨の日を迎えた。この日の緊張と感激は、のちのちまでの語り草となったほどであった。

同じ昭和十年は、明暗が極端に重なった年であった。本校創立者の三田義正翁が、大みそかの十二月三十一日夜、七十五歳で永眠したからである。実業家として大成したばかりでなく、人材養成の重要性を深く認識してそれを実行した巨人は、あたかもおのが命運の尽きなんとしていることを予知していたがごとく理路整然と遺言を口述し、その日のうちに、大往生をとげた。翁の人生こそ、「質実剛健」の実践であり「石桜精神」の具現であったといえよう。

翌昭和十一年、二・二六事件が起きて軍の独裁体制が確立された。外交面では、満州国承認問題をきっかけに、わが国は国際連盟を脱退し、やがてドイツ、イタリアとの三国同盟への道を歩むようになる。十二年には日華事変がはじまり、その解決がつかないまま、昭和十六年十二月、最大の「国難」であった太平洋戦争に突入する。

その間、国内は戦時色の傾向をますます強めて行くが、本校では昭和十三年三月に、待望久しかった新校舎を現在地に完成させた。日華事変の影響で、建築資材が高騰する中での工事であったけれども、三田義正前理事長の遺志をついだ三田義一新理事長の誠意が実って、ぶじ竣工にこぎつけることができたものである。

しかし、せっかくの新校舎での教育も、初代校長以来の教育理念が閉塞され、徹底した軍国主義教育に変わって行った。昭和十六年十月には岩手中学校報国隊が編成され、軍隊式の命令系統ができた。これはまた、学校教練や食料増産作業を効果的に実施するための組織でもあった。

太平洋戦争がはじまり、戦線が拡大するにつれて、卒業生の戦死者がふえた。教師に召集令状が来るようになり、生徒の勤労奉仕も強化された。昭和十九年からは学徒動員のため、高学年の授業ができなくなり、全国の学園に文字通り、暗黒時代が到来したのであった。